西宮版総合戦略に係る有識者会議

日　　時	令和５年２月８日（水）午後１時 30 分～３時 30 分
場　　所	西宮市役所第二庁舎４階　B405 会議室
出席委員	角野委員、古賀委員、三田委員、田中委員、花城委員、前島委員
事 務 局	清水政策局長、時井政策局担当理事、三村政策総括室長、堀越政策推進課長、田中産業部長、但馬都市ブランド発信課長、下野商工課長ほか
会議の公開	公開
議　　事	(1) 西宮版総合戦略の進捗状況について (2) 地方創生推進交付金事業について (3) 地方創生拠点整備交付金事業について (4) 次期西宮版総合戦略について

（主な意見）

(1) 西宮版総合戦略の取組状況について

・最近の西宮の状況として企業の流出が懸念される。産業の拠点となる会社をいかにつなぎとめるか考えなければならない。

・西宮は非常に暮らしやすい。市外の人間から見た場合にも西宮に住むことがステータスに感じるとの話をよく聞く。今後も継続して、住宅地としての良さを維持していくべきである。

・西宮北口を中心に市のイメージが良く、住みたい人が多い。その点は他都市と比べてすごく恵まれた市であると感じる。ただ、裕福な人が多くいる一方で、そうでない人が埋もれてしまうことへの懸念をすごく感じる。

(2) 地方創生推進交付金事業について

・スポーツビジネスの定義と、西宮にとってのスポーツビジネスを振興することの意義が資料から読み取れない。事業を実施したことによる結果を明確にし、次の方向性を示してほしい。

・甲子園エリアにいろいろな人に来てもらって、ひいては住みたいまちにつながればとのことだが、観光として行きたいということと移住したいということについては線を引いて考えるべきだ。

・これらの一つ一つ事業を積み重ねていくことが、一本道でＫＰＩの達成につながるものではない。ＫＰＩが達成できなかった時点で、実施事業について検証を行う必要がある。例えば、賑わい創出事業について、イベントを実施した際の交流は一過性のものになりがちなので、交流人口の増加を考えるなら、持続した交流を考えなければならない。

・賑わい創出事業の、令和４年度の実施計画に「「この時期の甲子園エリアはこれ」と呼ばれるような定例的なイベントの創出」とあるが、輪島の朝市はそれを目当てに人々が泊まりに来るような地域の目玉イベントとなっている。例えばそれぐらいのイベントをつくっていくというように目標を明確にして、関係者と共有することが

より効果的な事業展開に結び付くのではと考える。

・イベントの参加者数が伸びているのは一定評価ができる。ただ、このことが雇用を創出するビジネスの振興にはつながっていない。スポーツ文化を地域と一緒につくるイベントの部分と事業の創出は分けて考えないと、ＫＰＩのスポーツビジネスの創出数は最後まで０のままとなる可能性がある。

・コロナの影響もあって評価しづらい部分もあるが、事業の中身であるとか、ＰＲができているのかなど、検証の部分が資料からあまり見えてこない。

・イベントは鳴尾地域、ビジネスの振興については市域全体でとのことだが、その考え方や鳴尾地域におけるスポーツ資源に関する説明が資料の冒頭に整理されていたらわかりやすかった。

・ウェアや用品などの製造業、トレーニングなどの教育、計測、集客などスポーツビジネスには様々なジャンルがある。西宮市全体、あるいは兵庫県や関西で支えていくべきスポーツ産業もあるはずで、例えば大阪や神戸にある企業とつないでいったらよいのではないかという発想も出てくる。スポーツビジネスの振興といったときに、それが何であるのかきちんと定義し、鳴尾地域の魅力や課題とどうつないでいくのかを整理した上で、ピンポイントでどういった事業を実施するべきか考えなければいけない。

(3) 地方創生拠点整備交付金事業について

・銀行が持つコワーキングスペースには横のつながりと大企業との接点が持てることを期待して施設を利用する人が多い。市のコワーキングスペースについても、学生向けということであれば、ただ学生だけを取り込むのではなく、企業や銀行との連携・交流を考えるとよい。

・情報発信ルームについて、スタッフがお手伝いするという形にとどまるのであれば、利用者は機材を使うスキルを身に着けないといけない。スタッフがいて、ある程度つくってもらえるという形にすれば成立するのではないか。また、利用者についても、起業を目指す方だけでなく、既存で事業をしている方にもサービスを提供してはどうか。

・情報発信ルームについて、起業家支援センターの設置目的を考えたときに、起業家以外が使うことや専門的知識を持つ者を置いておくことは趣旨に沿わない。現状の本格的な機材については商工会議所に買い取ってもらって別のものを入れるほうが良いかもしれない。

・大学のメディア情報学科でも、以前は本格的なカメラ、スタジオで教育をしていたが、今は全部 iPhone で十分ということで、学生たちは上手に自分のセンスでそれを使いこなしている。少なくとも起業の段階では、他にいろいろと力を入れるべきところがあるので難しい機械は必要なく、むしろ iPhone を徹底的に使いこなすためのアドバイスの方が有用である。

・学生たちに対しては企業のアドバイスというよりは市の魅力的な企業を紹介して西宮で働いてもらいたいというのが本音ではあるが、商工会議所青年部とかＪＣとか既に働いている人たちとざっくばらんに話せる場を設けてあげるのは学生にとって

非常に有益と思う。働く人の親睦団体であるロータリークラブやライオンズクラブなんかも地域との接点を求めている。企業側としても優秀な学生を見つけることができてメリットになる。

・ＯＢの人たちがつくっているという西宮起業家連携コミュニティ「みやこむ」の取組は非常に魅力的だと感じた。

・学生に対し、起業とはどういうものか知ってもらうため、裾野を広げるための情報発信として、ＳＮＳでの発信を考えがちであるが、重要なのはいかに情報を相手に到達させるかという点にある。自身の経験では、動画を作成してＳＮＳにリンク先を貼って学生向けに発信することを行ったが、再生数は全然伸びなかった。そこで、民間大手の就職情報サイトに相談したところ、学生の周りは動画であふれており、興味のないものは見てもらえない、効果的な手法は漫画だと提案された。薄い漫画を作って置いたところすぐに在庫がなくなり、ＳＮＳで発信したら必ず見てもらえた。右肩下がりの出版業界の中でも漫画は唯一成長しており、学生向けに漫画で情報発信することは効果的な手法の一つだと思う。

・大学でも起業家セミナーは増えており、受講者も多い。各大学の取組を調べて、うまく連携できる仕組みを考えた方が良い。ポイントは、学生がハードではなく、人とつながることを重視しているということ。彼らは自分のアイデアを別の人のアイデアにどうつなぐかを意識している。

(4) 次期西宮版総合戦略について

・民間企業においては、ビジネスとして成立するのであれば、デジタル化による利便性向上を表にアピールしてもよいが、市役所は、来られる方の年齢層が高いことから一番遅れていてもよいのではないかと思う。コンビニやスーパーで進むレジの無人化などにお年寄りのお客さんは100％対応できていない。次期西宮版総合戦略の地域ビジョンにはデジタル化の記述がなく、いずれも人々のふれあいが存在するからこその記述となっている。デジタル化については、進めた方がベターである部分と絶対してはいけない部分をきちっと決めた上で、市の総合戦略を考えた方がよい。

・デジタルに親しみのない人はこれから減っていく一方だが、ゼロにはならない。そういったデジタル弱者の支援、お助け隊みたいなことは残してほしい。

・ＩＣＴ化、デジタル化は効率化の観点から世の流れだが、その弊害として地域のつながりがどんどん希薄になっている。防災の観点からも、インフラ、通信がだめになった際に一番の助けになるのは地域のつながりである。高齢者はガジェットやツールの扱いに疎いので、地方自治体が意識しないとデジタル格差がどんどん進むことになる。

・西宮は南北方向の交通渋滞がひどい。安全安心で住みやすいまちを目指す上で、交通問題を具体的に議論してほしい。

・デジタル化でとりこぼされるのは高齢者だけでなく、障害者とか、ツールを持たない生活困窮者もそうである。情報格差が生じないよう一定配慮が必要である。

・企業がＤＸ化を進める際にうまくいかないのが、自分の企業のみでやるケースとか、一つのシステムベンダーと一緒に行うケース。システムコンサルティングのような、

しっかりとしたトータルの考え方があってシステム化を進めるほうがよい。

・デジタル田園都市国家構想というのは、西宮市みたいな都会ではなくて、地方都市や中山間地域、つまり自然環境や農村環境が豊かなところでもデジタルを使えば最先端のビジネスや仕事ができることをうたっている。西宮市においては、西宮固有の魅力的な都市環境を享受しながら、更に効率のいい便利な暮らしを提供してくという視点が必要。船坂地域やウォーターフロントには可能性がある。

・デジタルデバイドは懸念されるところであるが、自治会、町内会レベルでデジタル化が進めば、地域の一番のベースとなるコミュニティの活性化が図れるので、市としてサポートしてあげるとよい。

以上